

# 『經理から見た日本陸軍』 を読んで

元門司税関長

広田 恭一

去る5月20日、興味深い本が出版された。本間正人著『經理から見た

日本陸軍』（文春新書、本体価格1200円）である。著者は1969年に生まれ、福島大学を卒業した後1997年防衛庁（当時）に入庁（事務官等）、装備施設本部や防衛装備庁で調達の業務に携わる一方、埼玉

大学大学院経済科学研究科博士後期課程に国内留学し、「軍需品と原価計算—軍需品の調達価格計算に用いられた原価計算の発展過程—」という論文で博士号を取得している。現在は学界に転身し秀明大学総合経営学部准教授の職に在る。

本書は順に「軍隊も予算がないと動けなかった」「經理から見た軍隊生活」「補給品を確保せよ!!」「軍需品の価格はどうか決まっていたのか」「陸軍經理部の歴史」「陸軍にもあった經理上の不正」の6章からなり、豊富なエピソードを盛り込みながら平易な文章で綴られ、読み易い良書

である。そのエピソードのうち、特に興味深いものを紹介する。

○ 陸軍担当の大蔵省（現在の財務省）主計官は福田越夫氏（昭和51年（53年首相）だったが、同氏は満洲をくまなく出張（満ソ国境の遼東やハイラルまで行っている）するのみか、北支や日本軍が進駐して間もない仏印にも足を延ばしている。北支では便衣隊（ゲリラ）の襲撃を受けているほどである。同氏の職務熱心な能吏振りを彷彿とさせる話である。

○ 独ソ戦に呼応する日ソ戦準備のため、昭和16年夏、関東軍特殊演習（関特演）の名の下に膨大な人員・物資が満洲に集められたが、結局日ソ開戦は無く壮大な無駄遣いとなってしまった。この点について本書は、当時陸軍省軍務課予算班に勤務していた加登川幸太郎少佐の以下の言を紹介している。「參謀本部作戦課の人たちは、この無駄に招集した50万という壮年の男たちが、当時の日本の国力や経済、軍需はもとより民需の生産力に、どんな影響を与えたかと考えてみたことがあるだろうか……」

12月の日米開戦以前に、国力は限

界に達していたということだろう。

○ 軍人の給与は格差が激しく師団長は二等兵の81倍も貰っていた。現在の貨幣価値に直すと月額242万円となるそうである。現在の師団長の約3倍である。このため、当時の師団長宅では、正月の三が日、朝から晩までおっ通しの大宴会が催されていたそうである。

○ 補給品ではパイナップルの缶詰の人氣が高く、納入業者との駆け引きに苦慮した。パイ缶は、当時は鳳梨缶と言われ、鳳梨は台湾では「オンライ」、中国では「フォンリー」と発音するそうである。最終的には陸軍側（台湾陸軍倉庫）が粘り勝ちしたものの9カ月に及ぶ厳しい交渉であった。

○ パイ缶もさることながら、上下を問わず将兵にとって必須なのは日本酒である。満洲では内地産と満洲・朝鮮産が競合し、最初は内地産の品質が優れていたが、満洲・朝鮮産の品質向上は顕著で、昭和13年度には樽酒19銘柄、瓶詰34銘柄で、月桂冠が飛びぬけている以外は同一の出来となった。また北支では現地において自前で醸造し、特級酒は「悠久」、一級酒は「大陸」と名付け、余剰分

は民間に提供するほどであった。

○ 原価計算方式の導入は後にマレー・シンガポール攻略で名を馳せる山下奉文少将が、ドイツの価格統制・原価計算制度に啓発され導入したものであった。同氏はそのいかつい風貌とは裏腹に、軍政に精通し幅広い教養を持った人物であった。

\* 山下氏がシンガポール陥落時、英将バーシバルに「イエスカノーカ」と強く迫った話が流布しているが、これは事実ではなく、英軍側通訳が技能拙劣で一部分しか訳せなかったことに起因している。山下氏は紳士的態度を崩さなかった。

読了後の感想としては、日本陸軍が巷間言われているような横暴、傲慢、強圧的な組織ではなく、市民社会との調和に努力を続ける節度と良識を持った集団だったという思いを強く持ったものである。

謙虚さを失い、大局を誤った少数の輩を除けば、日本陸軍は至極真つ当な人達の集まりだったと考えるべきではないか。是非「一読をお奨めしたい。」